

Chiara Ruffa (2020) "Chapter 59: Case Study Methods: Case Selection and Case Analysis,, in Luigi Curini, Robert Franzese eds, *The Sage Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations*, Los Angeles, Sage, pp. 1133-1147.

Chiara Ruffa (2020) 「事例研究の方法 事例選択と事例分析」 pp. 1133-1147.

### ➤ 紹介文

本稿は、政治学・国際関係論に関する定性的・定量的方法論を幅広くカバーした最新の著作、"SAGE Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations"に収められた論文である。特に、定性的・定量的手法における事例研究の位置付けについて検討を行っている。

### ➤ 概要

- 事例研究手法とは、政治学や国際関係論において、理論を検証し発展させることを目的としたアプローチを指す。
  - 事例研究の主要な特徴は、一つまたは少数の事例に焦点を当てつつ、根底にある広範でより一般的なダイナミクスを捉えようとする点にある。
  - 上記の点において事例研究は、次の相互関連的な二つの中核的な機能(two core inter-related functions)を有していると言える。第一に、事例研究は観察された現象の深さ(depth)と複雑さ(complexity)のすべてを記述しようとする。第二に、事例研究は特定の事例をより広範な事例に一般化しようとする。ただし、通例では上記の二つを同時に行うことはできず、研究者にはいくらかの妥協が求められる。
  - 事例研究には多様かつ異なる分析的立場が混在している。例えば、明確な実証主義的手法を重視する研究から、解釈主義的研究までがある。
- 事例研究は、国際政治学や比較政治学の分野からかつてないほどの人気を獲得した。その中でも、実証主義的な分析的立場を有する研究群は、事例研究によって得られた知見の一般化可能性を高めようと努力し、一般化を目的とした事例選択の手法に関心を焦点化した。
  - その一方で、これまでの研究では事例研究を実施し、その資料を解釈するための手法についてはあまり触れてこなかった。そのため、事例選択の手法を創造的かつ折衷的に用いることや、複雑な現象の事例分析とより体系的に関わることの重

要性が影を潜めている。

- 本稿は、事例研究における事例選択と事例分析についてより注意を払うべきであると主張する。事例研究は芸術(art)であり、技巧(craft)でもある。そのため、事例選択によって推論力を発揮し、事例分析によって複雑さを評価するためには、創造的思考と分析手法の習熟との両方を兼ね備える必要がある。本稿は、事例選択と事例分析の最も一般的な戦略を紹介し、それらをより創造的に組み合わせ、推論力(inferential power)を最大化しつつ、事例の複雑性を把握する方法を概説する。
- 本稿では第一に、他の研究手法を検討し事例研究の方法を位置づける。第二に、事例とは何か、何でないか、事例は何のためにあるかについて述べる。第三に、事例選択に関する様々な論理を確認する。第四に、単一事例研究手法を論じ、次に比較研究について論じる。最後に、事例研究に取り組む際の一般的な研究アプローチについて概要を述べ、最後に結論を述べる。

➤ **ポスト実証主義と統計的手法との間にある事例研究 (1134-1135 頁)**

- 事例研究は「岩と岩の間」にあるようなものである。
  - ・ 一方で、事例研究はポスト実証主義や解釈主義的なアプローチと相性が良いが、その根底にある存在論、認識論、方法論の前提が異なっている。特にポスト実証主義や解釈主義的研究は、事例研究が一般化可能性を目的とする点に疑問を呈している。
  - ・ 他方で、統計や定量的手法に関する研究において事例研究が活用されることはあるが、政治学や国際関係の分野では、事例研究は定量的手法の従属的・補完的な手法として利用されることが多い。
- しかし以下で述べるように、事例研究の手法にはまだ十分に活用されていない、あるいは十分な注意を払われていない多くの要素がある。

➤ **事例とは何か？何でないか？何のためか？ (1135-1139 頁)**

① **事例とは何か？**

- 事例(case)とは、研究対象となる広範な現象の一例として定義される
  - ・ George and Bennett (2005) は、事例(case)を「ある事象の集合における一実例(an

instance)」と定義し、事例研究とは「他の事象に一般化できるかもしれない歴史的説明を開発(develop)または検証(test)するために、歴史的出来事の一側面を詳細に検討すること」と言及している。

- Levy (2008)は、事例(case)を「空間的・時間的に拘束された一連の出来事を理解・解釈する試み」として指摘している。
- 事例研究は、革命、戦争、意思決定、軍事介入など、特定の関心を集める現象に焦点を当てる。ここで重要なのは、選択した理論から考えられる最小の分析単位で事例を特定することである。それによって、理論での想定が事例において実際に生じているかを観察することができる。
  - また、一つの事例と、理論が適用されうるより広範な事例の母集団とを区別することも重要である。
    - ◇ 例えば Alison (1971) の研究における「事例」とは、キューバ・ミサイル危機であった。しかしこの事例は、理論の焦点によっては、強制的な外交、危機管理、あるいは政治指導者の作戦規範といった大きな母集団の一部と見なすことができる。
    - ◇ 本稿著者の場合、平和維持活動における軍事文化に着目した研究の事例が、平和維持活動に派遣された国内部隊なのか、平和維持活動それ自体なのか、あるいは広義の国際的な軍事介入なのかを決めかねていた (Ruffa, 2018)。
      - 何を「事例」と定義するかは、研究者がどのような文献・先行研究に貢献しようとしているかによって決まる。著者の研究プロジェクトでの事例が、安全保障研究と平和維持に関する先行研究に貢献することに気づいたのは、最近のことであった。

## ② 事例とは何でないのか？

- 事例研究は、定量的研究において用いられる単なる説明に役立つ事例(illustrative example)と異なる。
- 定量的研究では、ある因果関係の存在や、根底にあるメカニズムを示唆するために、説明に役立つ事例(illustrative examples)を用いることが多くなっている。こうした事例は、経験的な領域において何らかの因果関係が作用している可能性を示唆したり、理論化の初期段階における現実の確認(reality checks)として用いることに有用となる。

- ・ しかし、定量的研究における事例(illustration)の必要性、使用頻度は高まる一方で、その範囲や目的が事例研究(case study)と異なることに変わりはない。
  - ◇ Haass and Ansorg (2018) による最近の論文は、上記した定量的研究が用いている事例と事例研究の相違をよく示している。両者はその研究において、「質の高い部隊による平和活動では、軍隊は民間人をよりよく保護することができる」と主張した。また、「質の高い軍隊は、国家および非国家主体からの暴力を抑止し、紛争地域内に緩衝地帯を作る能力が高く、平和協定の実施を監視する能力が優れている」(Haass and Ansorg, 2018: 1) ため、優れた保護が行われると主張した。上記の研究は平和維持活動研究に重要な貢献を行ったが、マリの事例(an illustrative example)を挙げているため、本格的な事例研究(full- fledged case studies)で得られるであろう、より広い全体像を見逃している。彼らの研究は、マリの平和維持活動について、オランダ、デンマーク、ノルウェー、フィンランドといった高度な訓練を受けた部隊からなるミッションという事実に着目している(Haass and Ansorg, 2018: 1)。しかし、こうした用例(illustrative example)への着目は、この事例(case)の中で生じている重要な力学を見逃している。実際には、オランダ、ノルウェー、フィンランドの部隊は現場に存在すらしておらず、非常に少ない人数で展開し、情報、監視、偵察任務について、情報指揮機構を通じて軍司令官に報告する任務に過ぎなかった。こうした点を踏まえると、両者の研究は平和維持活動の成功のメカニズムの特定に積極的に貢献したとは言えない。
  - ◇ 事例のバリエーションを探ることや、特定の要素を定性的に評価(gauge)することで、マリのミッションでなぜこのような結果が出たのかについて理解を深めることができる。
- ・ 以上のように研究の初期段階において、定量的研究の知見を補完するような事例(illustrative example)に着目するだけでなく、本格的な事例研究(full- fledged case studies)に焦点を当てることは有益と言える。

### ③ 事例は何のためか？

- ・ 事例選択の戦略は、どのような研究目的を持っているかによって異なる。以下では事例研究の目的に関する二つの区分を指摘する。(単一成果型研究、それ以外の事例研究)

- ・ 単一成果型研究(single-outcome study)

単一成果型研究では、対象となる現象を、より大きな母集団における一事例として把握することはしない。単一成果型研究は、理論構築を目的とする他の研究にとって豊富な情報を提供するかもしれないが、それ自体、理論への直接的な貢献を志向していない (George and Bennett, 2005, 75)。

- ◇ 事例研究は関心のある現象を記述する以上の野心を持たず、それによって歴史家の仕事へと接近する。歴史家の Isabel Hull (2005) は、1918 年までのドイツの制度的な過激主義について叙述している。Hull の研究は極めて特殊事例的といえるにもかかわらず、その後の軍事・戦略文化に関する理論的発展に多くの影響を与えた。

- ・ 単一成果型研究を除く他のすべてのタイプの事例研究

この立場には、さまざまなレベルの野心をもって理論の検証または理論の開発を目的とする研究が位置づく。以下の区分は、事例研究に関する古典的著作: George and Bennett (2005) 『Case study and theory development in the social sciences』における、研究目的の種類に応じた 6 種類の事例研究区分を参照とした。

- ◇ 体系構成型事例研究(Disciplined configurative case studies)  
この立場では、事例を説明するために確立された理論を使用する。
- ◇ 妥当性調査型事例研究 (plausibility probes case studies)  
上記よりも低い程度の、理論検証のための事例研究を意味する。
- ◇ 基礎要素型事例研究(building-block case studies)  
より焦点を絞った理論構築のための研究を意味する。

➤ **事例選択のテクニック(1138-1139 頁)**

- 事例選択とは説得力のあるリサーチデザインを作成するための最初の重要な研究ステップと言える (George and Bennett, 2005: 83)。
- 本研究は、便宜的(convenience)、無作為(random)、戦略的(strategic)という三種類の事例選択の区別を提示する。
  - ・ 便宜的(convenience)  
例えば、ある国の言語を知っているから、また政策的インプリケーションを得るためにある事例に関心があるという理由で事例を選択する場合、便宜的

(convenience)といえる。このようなアプローチでは、特定事例において理論が妥当な形で展開されるかについての知見をもたらすのが、理論の一般化可能性を最大化する等の戦略的な配慮があるわけではない。こうした事例選択は、より広範な事例群との関係に基づいて選択がなされていないという、選択バイアスの点で問題がある。

- ・ 無作為(random)

無作為(random)とは、事例をランダムに選択する方法を意味する。これは非常に多くの問題を有している。Seawright and Gerring (2008) は、ランダムにケースを選択すると、「実質的に代表性のないサンプルを生成することが多い」ことを示している (Seawright and Gerring 2008: 295)

- ・ 戦略的(strategic)

以上を踏まえると、三つ目の戦略的(strategic)な事例選択が有効であると考えられる。戦略的(strategic)事例選択とは、より広い学問領域において提示された仮説に基づき、事例を戦略的に選択することを意味する。

- 本稿著者がいつも役立つと考える研究のヒントは、理論に関して重要な決定を行う際、すでに事例について何らかの検討を行っていることである。研究者達は、まず理論を決めてから、研究デザインや事例選択に移るというロマンティックな考えを抱きがちだが、そうした視点から研究が進捗することは稀である。実際は事例に基づいて理論を練り直し、理論に基づいて事例を決定するという循環を繰り返していることが多い。

- 研究者は理論と同時に事例を検討することで、研究の早い段階で事例選択について熟考し、また事例の選択基準、研究の実現性、先行研究の知見等との間のトレードオフを省察できる。

➤ **単一事例研究(1139-1141 頁)**

- 研究目的が明確になったら、どのような種類の事例研究が可能かつ利用できるかを考える必要がある。本節では単一事例研究について採りあげ、そのメリットとデメリットについて述べる。

- 単一事例研究とはその言葉が示すように、一つの事例に焦点を当て、ある理論の信憑性を探ったり、特定の文脈で作用している因果関係のメカニズムを追跡したりする手法を意味する。事例数が多い研究デザインに比べ、単一事例研究は複雑なコンテキスト・要因を考慮することができる。
  - 単一事例研究のメリットは、事例を重視するため、ニュアンスの異なる複雑な概念を構築し測定できるという意味での、概念的妥当性の点で有効性を持つ。また、因果関係のメカニズムを探り、その過程を追跡することができるため、新たな仮説を構築する上でも有用と言える (Bennett and Elman, 2007)。
  - 単一事例研究のデメリットは、事例選択バイアス、つまりある特徴を示すことができる事例を選択するという点にある。例えば、平和維持に関する定性的な文献は、成功例よりも失敗例に焦点を当てることでこの問題に悩まされてきた (Howard, 2008; Pouligny, 2005)。また、研究範囲や必要性を特定することにも困難を有している。典型的な事例は別として、単一事例研究では、観察している現象が事例の母集団を代表しているかどうかを知ることはできない。また、単一事例研究は、影響を与えていると考えられる因子以外の因子の影響、すなわち交絡因子という根本的な問題を抱えている。

#### ➤ 比較事例研究(1141-1142 頁)

- 事例比較は、二つの事例を選んで比較することを意味する。比較のデザインには、主に、「最も類似したシステムの事例比較」と「最も異なるシステムの事例比較」の二種類が知られている。
  - 第一に、「最も類似したシステムの事例比較」とは J.S. Mill の「一致法・差異法」に基づいている。ここで選択される 2 つの事例は、多くの交絡変数が類似した特性を示すことに基づいて選択される。
  - 第二に、「最も異なるシステムの事例比較」とは、二つの事例が、関心のある独立変数または従属変数以外のあらゆる点で異なるという根拠から選択される。この古典的な例として Theda Skocpol (2015) による仕事がある。
  - 上記した二つの比較手法は、具体的な事例比較について考える場合、相互に排他性を持つ。しかし、より複雑なデザインになると両者は組み合わせて用いることが可能である。
    - ◇ 例えば本稿著者の研究では、レバノンの国連ミッションに参加するフランス軍とイタリア軍のユニットと、アフガニスタンの NATO ミッションに

参加するフランス軍とイタリア軍のユニットについて、両アプローチを創造的に組み合わせることを試みた。研究では、最も類似したシステムの事例比較によって、交絡因子をコントロールし、自分の理論の妥当性を測ることができた。また最も異なるシステムの事例比較では、全く異なる二つのコンテキストで著者の理論が成り立つかどうかを確認し、外的妥当性を最大化することができた。

- 比較法は、少数事例研究がもつ特定事例に関する知見の豊かさという特徴を、ある程度維持しながらより高い一般化可能性と交絡因子の制御を目指すために有効な手法である。
  - しかし、こうした比較法には二つの弱点がある。第一に、比較を目的として特定の特徴を有する、「良い事例を選択する」という選択バイアスが残ることである。第二に、事例間の独立性を見逃し、リンゴとオレンジを比較するような危険性を有している点である。

#### ➤ 事例研究の方法に関する選択肢(1142-1144 頁)

- 事例選択に関する文献は数多くあるが、実際に事例を選択した後に何をすべきかについてはほとんど知られていない。事例選択と事例分析は異なる段階として広く考えられているが、それは正しくない。事例研究の方法とは、事例選択と事例分析の間で、通常認識されているよりもはるかに多くの循環的な往復が求められる。
- 本節では、上に述べた事例研究を行うための三つの戦略として、「過程追跡」、「構造化比較(structured focused comparison)」、「一致法(congruence theory)」を簡単に紹介する。
  - 「過程追跡(process tracing)」  
過程追跡とは、事例研究において最も一般的な手法の一つであり、「研究者によって提起された研究課題と仮説に照らして選択・分析された、研究上のエビデンスの体系的な検討」を含意する (Collier 2011: 823)。
    - ◇ George & Bennett(2005)の研究において体系的に検討されて以降、様々な種類の過程追跡が登場した。それらは主に、実証主義的な研究手法と解釈主義的な研究手法とに分かれている (Beach and Pedersen 2013)。
    - ✓ Vennesson (2008: 232) が指摘するように、「今日の過程追跡の役割



は、過去に定式化されたよりも、独立変数と従属変数をつなぐ因果メカニズムの発見という点により標準化されている。

- ◇ 過程追跡は素晴らしい分析手法ではあるが、方式にとらわれずに現実的(pragmatically)に使用されなければ、より大きな全体像(the bigger picture)を見失う危険性がある。これについては、過程追跡を因果メカニズムの検証(test)と同一視しないことが重要である。Gerring (2010: 1499)が述べるように、「メカニズム的使命に則った独断的な解釈」は避けるべきである。

- ・ 「体系的重点比較法 (structured focused comparison)」

体系的重点比較法とは、研究者が、自身の理論的関心から導かれる特定の研究目的に「照らして一般的な質問票をつくり、そうした質問を研究対象の各事例について問いながら標準化されたデータを収集することで、体系的比較と事例に関する発見を蓄積すること」を目的とした手法である(ジョージ&ベネット 2013:79)。

- ・ 「一致法(congruence theory)」

「一致法」は、「複数の事例における共通の結果と関連のある独立変数の類似性を解明しようとする」手法である(ジョージ&ベネット 2013: 172)。因果関係のメカニズム明らかにする点に関しては、一致の方法は不十分であるため、過程追跡を補完するために活用されることが多い。

- ◇ 前の二つよりも技術的には劣るが、一致法は複雑なフィールドワークの地形(terrain)にアプローチするための実用的な方法である。

➤ 結論

- ・ 定量的手法の普及は、政治学や国際関係において事例研究が果たす役割に課題を投げかけている。事例研究手法は定量的手法を補完するために有益に用いることができるにもかかわらず、その特殊性、利点、欠点は維持されたままである。
- ・ 事例研究の今後の課題は、経験的な厳密さ (empirical rigor) と透明性(transparency)の向上に努めることにある。定量的研究や定性的研究を跨いだ政治学サブ分野間の相互肥沃化(cross-fertilization)が展開される中、事例研究とは何か、そして事例研究に何が含まれるかについて、さらなる研究が求められている。

- 本稿は研究を行う上で留意すべき三つの次元の重要性を指摘した。すなわち、目的の設定、事例選択、事例研究の実施段階である。以下で具体的に確認したい。
  - 第一に、どのような研究目的を持っているか、また自分が置かれている状況を考慮し最善の研究設計を行っているか明確にし、明示することが重要となる。第二に、事例研究手法において、研究上の重要なトレードオフを認識し、制約がある中でどの研究デザインを選ぶべきかを認識することが重要である。最終的には様々な制約の中で、研究課題に答えるために最も有効な方法とは何か、という問いに帰着する。第三に、事例研究手法は、社会科学研究における「技巧 (craft)」と「芸術 (art)」の実りある融合を意味する。事例選択や事例分析に応用可能な技巧・技術を習得することは重要ではあるが、創造性を育み、「事例に語ってもらう」ことも同様に重要となる。

#### 参考文献

George, A. L. and A. Bennett, 2005, *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*, The MIT Press.(=泉川泰博(訳), 2013『社会科学のケース・スタディ 理論形成のための定性的手法』勁草書房.)